# カント哲學に於ける「實踐的」の意義

務臺理作

## 一

カントが批判哲學の種々なる場所で、理論的使用から區別して示した理性の「實踐的」使用の意義は、前者ではたとへ想定せざるを得ないにしても、それの可能は不可解であり對象自體としては結局空虛な概念に過ぎなかつた純粹理性概念に、積極的客觀的なる實在性を與へ、前者では超越的ならざるを得なかつた理性使用を內在的に規定することにあつた。理論的立場では蓋然的(problematisch)に過ぎないものが、どうして此處に必然的(apodiktisch)な實在性を持ち得るのであるか、經驗對象の持つ實在性とこれとはどう云ふ點で異なるのであるか、また如何なる關係に由つて聯結するのであるか、此問題に關するカントの考察を略說し若干の卑見を附記して見たいと思ふ。

勿論理論的思辯的立場に於て、悟性の經驗的使用を超越し可能的經驗一般に對して全體的完成、組織的統一を見出さうとするのは、純粹理性の已みがたい要求である。理性の求めるところは、對象に對する關心から新しい認識範圍の擴張を企て、其處に經驗の適用を試みやうとするのでなく、却つて認識能力自身の立場を深く反省して、經驗に向つては永久の理念として留まる無制約者の意義を認識しやうとするにある。夫れ自ら他に由つて制約さるゝことなく、常に一切制約の根據となり得るやうな超經驗的なる「世界」とは何か。人類の永い思索の歷史の中で繰返し顧みられたこの問は、私たちが已に贏ち得た經驗對象界に滿足せず、對象をして可能ならしめる認識主觀の根抵を深く反省して、「悟性を自らと完全に調和させ、」「悟性の制約的認識に無制約者を見出さうとする」純粹理性の切なる要求の表現に外ならなかつた。理性は無制約者を要求する、そして「若しも理性概念が無制約者を含むならば、すべての對象がそれに依屬し然かも夫れ自ら決して對象となることのないやうな或る者に理性概念は關係する。それに向つて理性は……經驗を超越し、それに由つて經驗的使用の深度を評價する。が然しその者自らは決して經驗的綜合の一項となることはない」(1)。此處に云ふ或るものとは、理性が求めて自らの對象とする意識の先驗的主體、可

能的經驗の全體、及び理性の窮局的目的、卽ち先驗的理念と呼ばれるものを意味して居るが、就中經驗の「全體」としての無制約的「世界」は最も重要なる理性概念の對象である。それから見れば如何なる吾等の經驗も常に部分的なるもの、不完全なるものとして「全體」としてのそれに依屬せざるを得ない。全體とは誰しも知る樣に部分の單なる集合に由つて示されるものでなく、部分の達し得られぬ高き次元にあつて、部分を限りなく統一するものである。それ故凡ての經驗は各自の定められた範圍に於て如何樣に完成して居るかの樣に見られても、猶悟性概念に由つて制約せられて居る限り、無制約者に對しては常に有限であり、部分的、不完成的であるを免がれ得ない。經驗は充足理由に由つて成立すると云ふ點から見れば、どの樣な經驗もすべて充分な根據をもつ點で完全であり、またそれに由つて現實的客觀性を持ち得るのであるが、然し無制約者を求むる理性は、充足理由そのものを反省的に規定し、經驗を單なる擴がりの平面でなく、「深さ」の相に於て評價しやうとする。「悟性は法則に由つて現象を統一する能力であり得る、そのやうに理性は原理(Prinzipien)の許に悟性法則そのものを統一する能力である。理性はかくて、經驗またはそれに屬する對象へ直接向ふのでなく、却つて悟性へ、それの多樣なる認識に概念(理念)に由る先驗的統一を與へる

ために向ふ。この先驗的統一は理性統一と呼ばれ、悟性の有する統一とは全く種別的に異なるものである」(2)。このやうに經驗の全體を求め、「深さ」に從つて評價しやうとするために、理性はその中に經驗以上のものを含まねばならない、理性統一の原理は無制約的でなければならない。かやうにして理性は、無制約的な世界を現實的經驗の到達し得ない彼岸の國に建設しやうとする。すでに認識し得たものゝ一切にまさつて、より完全に調和した、より組織的に統一した世界の實現を理性は要求してやまないのである。

このやうな理性の先驗的にして無限なる統一に比すれば、悟性概念は、「經驗のため經驗に先立つて考へられる」にしても、しかしそれは「現象に關する考察(Reflexion)の統一より他のものは自分の中に含まず、その限り必然的に可能的經驗意識に依屬すべき」ものである。(3) 理性概念が經驗の彼岸の國に根源を有し經驗に對して「超越的」であるに比すれば、これは經驗の原理として、「それに由つてのみ對象の認識と規定とが可能である」ところの能力として、その適用は「內在的」範圍に制限されてゐる。云はゞ理性の評價の前に、その能力を超ゆることなく內在的に構成したものを、經驗事實として呈供するの役目をつとめる。かくの如く悟性が專ら經驗の形式原理 (intellektuelle

Form）として、その適用を常に可能的經驗の範圍に留め、それをば超えて直觀の及び得ぬ叡智界に到らしめず、從つて經驗に先立つどのやうな實在性も認識しやうとしないのは、悟性にとつて何より正しいことであるばかりでなく、かゝる制限を悟性に維持せしむるは、また理性の重要なる職務である。なぜとなれば、若しこの制限を顧みぬならば、悟性が本來具有する能力、卽ち感性以外の何ものに由つても認識構成を抗束されることがなくまた感性に對しては自發性（Spontaneität）の根源として自然に從ふでなく却つて自然を規定するの獨立性を、そのために破壞するばかりでなく、また理性が常に經驗を超越してこれを評價し指導する能力を危くさせるからである。然し經驗の範圍に制限せられ直觀の領域に抗束されてゐることは、たとへそれが悟性の自發性に基き、それに由つて經驗の可能と必然とが保證されるにしても、組織的統一の原理から見れば結局は、被制約者より被制約者へ轉移して已まない有限界、全體と完成を求めて常に充たされない經驗界の建設に過ぎない。誰が此經驗界に於て、理念としての「世界」の決定的概念（bestimmter Begriff）を持ち得たであらう。然り、限りなく完成を求めて然かも見出し得ない運命に由つて經驗自身の不斷の改新と無限の擴張が企圖されてゐる。若しもこれに反して、經驗の範圍に無制約的全體的完

成が見出されたとしたならばその結果はどうなるであらう。可能的經驗の及ぶ範圍にあつて然かも夫れに先立ち豫め存在するものを許すこと、卽ち單なる現象に與ふるに經驗に先立つて自存する物自體(卽ち叡智界)を以てする外はない。それは却て經驗成立の基礎を破壞する。されば無制約者(das Schlechthinunbedingte)を求めて已まない理性から見れば、どの樣な經驗の悟性使用も常に不完全であり、かく不完全であることがまた必然的である。理性はこれに由つて自らの課題——全體的完成、組織的統一の世界を實現せんとする——を解決することは出來ない、理性は常に經驗使用に對して不滿足である。此處に於て、かの悟性が自らのため經驗範圍を超えやうとせず其處に內在的なる經驗統一を企圖するやうに、理性もまた自らの課題のために、經驗の領域を超越して一方には認識主觀そのものを深く反省し、他方には無制約者に對する關心を十分に滿たさうがために益々悟性使用に超越的ならざるを得なくなるのである。

さり乍ら如何なる對象にしても吾等の思惟し得る限り悟性概念に由る外はなく、理性の對象とする無制約的世界も悟性概念を介してのみ、それは verstehen するではないが然し甫めて begreifen し得るのであるから、丁度悟性の範疇が圖式に由つて綜

合を可能にするやうに、理念もまた範疇に何等かの抗束を求むるに非れば思惟することさへも不可能になる。然るに經驗的使用卽ち圖式を離れて悟性概念を用ふことの、何等積極的の意義なきことは繰返しカントの敎ゆる處である。「あらゆる悟性認識はその概念を經驗に於て現はし得ることゝ、その原則(Grundsätze)を經驗に由つて確證し得ることを特色とする。」(4) 卽ち經驗の中に決して與へられることのない理念の命題に關しては悟性の認識はこれを承認することも否定することも出來ない。たとへ理念は、かの已みがない理性の要求を經驗の上に示すものにせよ、それに由つて私たちは何ものを認識することも出來ない。認識の立場から見れば理念——無制約的世界は單に空虛なる概念に過ぎない(經驗の如何なる對象もこれに合致(kongruieren)しない故に)。私たちは一方に於て經驗と理念の深い調和を要求すると共に、他方に於ては前者が專ら內在的であり後者が超越的であるために、二者の間に何が共通するかを知り難く、それに向つてどの樣な說明も與へることの出來ない破目に陷らねばならない。

かくの如き理念の運命を以て理性は滿足し能ふであらうか。否、理性はまさに陷らうとするアンチノミーの危險をひとり自分の力に由つて救濟し、これに積極的な

解決を與へねばならない。經驗と理念の結合は理念自らの要求である。理念は經驗の全體に妥當するものとして先づ理性の中に設定された、彼の超越性は、それと經驗との結合が一の經驗と他の經驗との結合關係から種別的に區別されやうための警戒であつて、經驗と絶緣するためでなく、却つて經驗と調和しやうがためである。此理を通して純粹理性の私たちに敎へるところは、上の矛盾の前に展かれる「限界概念」Grenzbegriff の深き意義である。

由來理性は悟性の經驗使用に制限を認めても、その間に限界を認めることはない。限界と制限(Einschränkung)とは區別されねばならない。限界は、そのやうに限局されるものに對する積極的な或る關係を含むけれど、制限は單に否定のみしか含まない。(5) 例へば悟性認識が超感性的世界について未知であると云ふことは絶對に必然であり、それは經驗の結果に由るのでなく、Ergründung der ersten Quellen unserer Erkenntnis に由つて確證さるゝことである。卽ちこの場合には、たとへ未知的であつても猶經驗一般に對する積極的な關係が、理性の限界規定に含まれて居る。これに比して制限とは、恰かも私たちが地平を眺むる時、私たちを取り圍んで見える地平線のやうなものである。私たちはその向ふに何處まで遠く地平が續いて居るかは知らない、然し

また、何處迄進んでも私たちの周圍に常にその圏線がとりめぐつて見えること、從つて何處迄でも進み得ることを知つて居る。卽ち地平線に由つて視野の制限は示されるが、限界は示されない。然し若し私たちが地球の直徑を計つて、それに由つて表面の大きさを知るならば、その時こそ地平の限界を明らかにすることが出來るであらう。たとへ地平の一切に如何なる對象の存するかは未知であるにしても、それは限界の積極的認識(悟性認識とは異なるが)を妨げはしない。私たちの認識に對する可能的經驗の全體は、丁度この地平のやうに、地平線にとりかまれて私たちの前に現はれる。私たちが經驗に由つて地平線に達することは絶望である。なぜとなれば經驗を通して理性の內在的進行が、何處で無制約的總體に到達するかと云ふことを私たちは知らないからである。然しこの地平線の外へ、結局その「限界線」にあるものへと理性の問の向ひゆくのを妨げはしない。(6) 經驗一般の限界は經驗に由つて視野の果しに求め得られず、却つて主觀の根源に還り、認識そのものを反省することに由つて、卽ち理性に由つてはじめて達し得られるからである。

理論理性の爲し得べき唯一の仕事は、經驗の可能のために現象の客觀的綜合を行ふことでなく、悟性が示し得ず、ひとり理性が理解し(begreifen)得る叡知界(理念)への聯結

を經驗系列の最初にまたは最後に見出すことである。然し叡知界そのものが以前として空虛であるばかりでなく、經驗の最初または最後と云ふべきものも、夫れ自らまた一の理念であるならば、私たちはどうして上の如き聯結を語り得るであらうか。此處に云ふ空虛とは抑々何を意味するであらうか。若し理念が絶對的の空虛であるならば、理念は悟性統一に不可解であるばかりでなく理性自らにも無意義なものであらう、然し理念は「課題の完全なる解決を目的として起れる理性の要求」に外ならぬものであり、それなくしても經驗的使用は盲目ではないが然し kurzsichtig にならざるを得ないために、經驗の組織的統一に、かくして經驗のために缺くべからざる目標、指導の概念である。それ自身「要求」でありまた指導に役立つものが空虛と見らるゝは、理性が一方には經驗のために經驗の「限界」を明らかに示さうとし、他方にはまた自らのために理性適用の「限界」を設けんとして理性が自己の周圍に認むるもの、卽ち限界一般の意味に外ならない。限界は常に唯一である。何となれば「理性は經驗に於て制限を認めるが限界をば認めない」故に、經驗に限界を認むるは夫れ自身理性使用の限界であるからである。卽ち限界とは經驗概念ではなく理性概念に屬するが、然し「充たされたる空間(經驗)と空虛なる空間(吾々に全く不可知なるもの卽ち本體(ノウメノン))と

の接觸」「已知者の未知者(それは常に未知者である)に對する眞實なる聯結(eine wirkliche Verknüpfung)」(7)を表はすものである。この聯結に於て未知者の少しでも私たちに知られることはないが、然し規定せられ明確にされねばならない概念である。「限界は經驗界に屬すると共に叡知界に屬し、私たちはそれに由つて特異なる理念が人間理性の限界規定を示すものであると教へられる。」(8)限界概念は理性の要求を經驗界に表現する唯一の理念である。「限界」は單にそれだけの意味しか含まない故に(叡知界が如實に如何なるものなるかは措いて問はないから)、夫れ自身は積極的なもの(感性の僭越を抑制する點より見れば消極的であるが、然しかく感性の制限と聯絡するその點に於て或る積極的なものを持つから)として、限界の内にあるものにも外にあるものにも屬する故に、依然としてeine wirkliche positive Erkenntnisである。勿論この認識は單なる悟性のそれではなくて、悟性と調和せんがために理性が自ら超えんとして然かも超えざる限界の認識である(若し理性がそれを超えて叡知界を「認識」せんとするならば悟性と理性の調和は破壞されるであらう)。理性の理論的になし得る唯一の仕事は經驗に抗束せられずに自らの限界に迄進み行き、然かも此限界を超えずして、却つて「限界の知識(Kenntnis der Grenze)と一致し得るやうに感性界の外にあるもの

と內にあるものとの關係のみに自己を制限することにある」(9)卽ち限界を超えて超越的(transzendent)なものに眼を轉ずる代りに、再び內在的なものを回顧して(これ認識そのものに就いての反省である)、經驗の範圍に制限を與ふると共に可能的經驗の範圍に於ける理性自身の完全なかくして最高目的に向けられた適用のみを問題とし、經驗の中に、未知的なもの、無制約的なものが恰かも存在するかのやうに認識することである。限界概念は感性界に對するかくの如き關係を含むものでなければならない。吾等が無制約的世界(世界理念)について何等かの意義を語り得るならばそれは限界としての世界の義でなければならない。彼のすぐれたる三理念の意義もこれに屬する。それは經驗に關する悟性使用の完成、それを通して見出さるゝ經驗的なものと叡知的なもの、內在的なものと超越的なもの、有限なものと無限なるものとの完全なる調和より他のものを含まない。それは直觀又は對象の完成でなく經驗そのものゝ完成、「認識原理の完全性」に關する深くして極まりない反省である。永久の課題である。制約より制約を求めて完成することない悟性使用に「完全な調和と完成と綜合的統一(durchgängige Einhelligkeit, Vollständigkeit und synthetische Einheit)とを與へる原則(Grundsätze)」である。(10)

然しながら此原則は、可能的經驗への圖式より他のものを含まない純粹悟性の原則と、種別的に相異せねばならない。何となれば前者は自らの限界を超えないために、か樣な圖式を持つことが許されぬからである。卽ち上の原則は經驗の客觀性のために妥當するのでなく、「全體」としての經驗一般のみに、認識「主觀」そのものゝために、かくして理性自身のために規定した主觀的原則である。此原則に從はざれば經驗が必ずしも不可能であると云ふではない。只從はざれは經驗の系列が完成することなく、理性の目的に叶ひ難いと云ふのみである。それは經驗の公理 Axiom でなく認識主觀の課題 (Problem) であり法則 (Regel) である。Er (der Grundsatz der Vernunft) ist also kein Prinzipium der Möglichkeit der Erfahrung.....kein Grundsatz des Verstandes; .....auch kein konstitutives Prinzip derVernunft, den Begriff der Sinnenwelt über alle mögliche Erfahrung zu erweitern, sondern ein Grundsatz der grösstmöglichen Fortsetzung und Erweiterung der Erfahrung, nach welchem keine empirische Grenze für absolute Grenze gelten muss, also ein Prinzipium der Vernunft, welches als Regel postuliert, was von uns im Objekte.....an sich gegeben ist. Daher nenne ich es ein regulatives Prinzip der Vernuft.(11) それは構成原理でなくて規制原理である。かくの如く「對象の性質 (Beschaffenheit) に由らず、此對象の認識の可能的完全性に關す

る理性の關心に由る」規制原理は、理性の格率（Maxime）と呼ばれる。(12) 然しこは認識に關聯して甫めて意味をなす故に「論理的格率」(logische Maxime)「理論理性の格率」(Maxime der speculativen Vernunft) と呼ばれる。(13) 卽ち限界概念は理性の格率である。カントは此格率の意義を宇宙論的理念としての自由の問題に於て最も明らかに示した。

世界の意味を現象界、經驗界のみに限るとすれば「自由に由る原因」は失はれる、然しそれを叡知體、物自體として見れば自由は救はるゝ代りに自然の客觀的必然性は傷はれる（叡知的偶然 intelligible Zufälligkeit を許すが故に）。此アンチノミーを解決するものは、現象と物自體を峻別し、一方に自然必然性は現象のみに關係すると見、他方に現象と物自體が唯一の主體に結合すると考へて自由を救濟することである。「自由」とは、宇宙論的意味では出來事としての現象を「自ら始める」(von selbst anfangen) 絕對的自發性 (absolute Spontaneität) である。換言すれば他の原因を俟たずして「已れ自ら始めることが出來」(selbst anfangen dürft)、從つて其始めを規定する他の法則を要しないものゝ謂である。之に反して「自然必然性」とは、一の現象の原因がまた現象中に屬し、從つてそれもまた時間的に先立つ他の現象の結果に過ぎなく、かくして自然秩序の唯一系列 (einzige Reihe der Naturordnung) が可能となる制約の謂である。この相反する二つ

の命題が唯一の主體に結合する時、それの原因性が叡知體であり、結果のみが現象界に屬すると見られて、原因は經驗制約の外にある故に自由を救濟し、結果はその中に屬する故に自然の必然を維持する。かくて「結果は叡知的原因に關しては自由であり、同時に現象に關しては依然として必然的なる出來事として見られる。」(14)然し此處に考へる唯一の主體とは何ものであるのか。若しも此主體が自己を自由と考へる時、同じ結果を自然法則の許に考へて必然的であると云ふと全く同一の意味で己れ自らを考へるならば、それは全く矛盾であつて、矛盾した二つの命題が一つの主體に屬することは不可能である。即ち上の場合に於て、主體を自由と呼ぶときと、自然の一部として自然の法則の許に依屬すると見る場合とは、主體を別の關係に考へねばならない。而して此二つの關係は唯一の主體に必然的に結合せられ居ると考へねば、私たちは上の矛盾を解決することが出來ない。唯一主體は二者自らの必然的結合を前提せねばならない(suppositio relativa)。即ち主體とはかくの如き結合點でなければならない。カントはこれを行爲的主體(handelndes Subjekt)の意味に由つて明らかにしやうと試みた。即ち宇宙論的理念の許に「行爲」概念を導入することに由つて所謂力學的二律背反の解決を示さうと企てた。

唯一の行爲的主體卽ち「行爲の因果性」は行爲に關しては物自體として叡知的(intelligibel)に、結果に關しては感性的(sensibel)に見られる。かゝる因果性の法則として性格(Charakter)が考へられるならば、叡知的性格とはそれに由つて行爲的主體が「現象としての各行爲の原因」となるもの、然し夫れ自身は決して感性界に現象するなく、從つて時間制約の許に消長せず、變化の法則に支配せられず、すべての經驗的制約の許に依屬するなきものを意味する。それ故叡知的性格は感覺對象の如く直接認識されることなく(何となれば現象せず從つて知覺されないから)、單に吾等の思惟(Gedanke)に現象の根據として蓋然的に考へらるゝものである。これに反して經驗的性格とは、それに從つて感性的存在者(Sinnenwesen)の因果性が成り立つ法則、卽ち自然秩序の一項として自然法に依屬するもの、それに由つて「行爲」が現象として、他の現象と共に自然規定のすべての法則に支配せられ、從つて經驗に由つて認識せられ說明せらるゝものを意味する。卽ち宇宙論的理念に由れば前者は先驗的自由として「その行爲を彼自ら始めることなくして然かも結果を感性界に始めるもの」(15)であり、後者は自然必然性に屬するものとして、行爲的主體を現象界に置き、現象界の一員として自ら始める「代りに常に時間的に先立つ他の現象に由つて制約せられる。前者を自

ら始める因果性卽ちcausa noumenon と考へるならば後者はそれの現象である。所謂根源的行爲(ursprüngliche Handlung)は先驗的自由の上に成立するものとして常に前者に屬しなければならない。

然し唯一の行爲的主體に於て、物自體と現象とは如何にして結合し得るであらうか。唯一の行爲に於て、經驗的因果性が、自ら決して現象することなき叡知的因果性—根源的行爲の結果たり得ることが如何にして考へられるであらうか。卽ち叡知的性格と經驗的性格の結合を可能ならしむる原理は何であるのか。ライブニッツに由つて好んで用ひられた「見地」(Gesichtspunkt)の概念は此處にも役立つ樣に思はれる。「人」は經驗的性格の見地より見れば「感性界の現象の一として、またその限り自然原因の一として、他の自然物と同樣にその因果律は經驗的法則の許に立たねばならない。吾等は「結果に現はるゝ彼の力と能力に由つて彼を認める」ことが出來る(homo phaenomenon)。然し同時に「人」は叡智的性格の見地に由れば、感覺に由つて全自然を知るのみならず、彼自らを統覺に由つて、特に「行爲」「內面規定」に於て認識する(homo noumenon)。(16) 卽ち「人」は一方には自らを現象として、受動性に於て、他方には叡智的原因として、自發性に於て知ることが出來る。然し此二つの「見地」は如何にして唯一の「人」に結

合するのであらうか。

此處に私たちは再び理性の問題に立ち還らねばならない。理性がこのやうな結合の原理であるからである。理性は「行爲」の原理であつて、「行爲的主體」、「人」、「內面的規定」は何ぞやと問ふことは、卽ち理性の職能は何ぞやと問ふことになる。何となればひとり「行爲」の問題に由つて、最も明瞭に宇宙論的理念としての自由の問題が理解せらるゝならば、行爲の意義は自然行爲の原因たる根源的行爲の本質に存すべく、それの內面的規定は、理念に由つて「自ら行ふ」ことの外にない筈であり、斯の如き能力のみが理性と呼び得られるからである。「人」は「理性的存在者」(vernünftiges Wesen) でなければならない。然し私たちが純粹理論理性の名の許に解し來つたものは、斯の如き「行爲の原理」としての職能に堪え得るであらうか。理論理性の關心が結局經驗對象の最高統一に向けられてゐる限り、たとへそれが主觀的統一であるとは云へ(カントに由れば Heautonomie に由るのであつた)、猶對象界への關心に制約せられて居る(この制約は理性自らに屬するにしても)。然し此處では行爲の原理として、行爲の主觀——Gesinnung、卽ち純粹意志の規定原理としての理性が要求される。かの理論理性の原理が論理的格率であるに對して、此處では意志の格率、卽ち實踐的原理が要求される。

そは對象の構成に關心するのでなく、意志規定そのものを問題とする。すべて實踐理性に屬する問題である。此處に理論的より實踐的への移りゆきが考へられねばならない。經驗的性格に關しては、行爲は自然制約に支配せらるゝ故に自由は失はれる、然し同一の行爲を理性に關係させて考察するならば、それは起源に關して行爲を說明せんための理論的立場でなく、理性が行爲を創造する原因である限り、一言にして云へば實踐的立場に於て行爲を理性と比するならば、私たちは自然の秩序と全然異なる他の法則(Regel)と秩序(Ordnung)を見出すであらう。(17)自然と異なる秩序の世界——それは意志の世界、叡智的性格の世界、causa noumenon の世界である。かくの如き世界の必然的であることは「實踐的法則の單なる形式(blosse Form der praktischen Regel)」に由つて可能的行爲を私たちに命ずる Imperativ, Sollen が確證する。この確證を超えて叡智的性格そのものが如何にして可能であるか、如何にして自由であるかを如實に「說明」せんと望むならば、それは理性の限界を破壞することであらう。Imperativ, Sollen は卽ち理性の限界概念に屬する。

宇宙論的意義に於ける自由の問題は、かやうにして「行爲」の問題となり「人」の問題となり實踐的格率の問題となつた。自然認識の理論的課題と種別的に異なる理性の

實踐的課題、卽ち意志規定の前に今や私たちは立たねばならなくなつた。勿論宇宙論的問題は必ずしも「行爲」概念の問題のみに由つて解決せんとするものではない。それは宇宙のまことの始めと終りに關し、全體と完成に關する問題であるからである。その立場より見れば行爲の問題は單に解決の「一例」に過ぎないであらう。自然の全體、宇宙の綜體が直ちに意志であると云ふのは、却つて理論的立場をおびやかすものであらう。行爲の問題は宇宙論的問題を「理解するための例に過ぎない、吾々の問題に必然に屬するものではない。吾々の問題は現實界(wirkliche Welt)に於て見出し得る性質から全く獨立に概念のみに由つて決せられねばならないから」。(18)理論理性の職能は飽くまで經驗の悟性使用と自らとの調和を見出さんためである。理念は此處では、現實的行爲の動機(Bewegungsgrund)になるがためでなく、bloss relativ, zum Behuf der systematische Einheit der Sinnenwelt のために考へらるゝに過ぎない。然しながら此處に避け得がたい理論理性の難關が横はつて居る。「理性は全く可能的經驗以外のものを私たちに敎へない、且この對象に關しても經驗に認識出來るものより外に如何なるものも示さない」と云ふ理性の制限は、私たちが理性の限界にまで進んで、未知者ではあるが然し想定せざるを得ないもの(理念)と、經驗一般と、の「聯結」を理解

(begreifen)するは妨げなかつた。かやうにして限界概念を通して規制原理としての格率が私たちの前に示された。然し格率とは如何なるものであるのか？意志の自由も理論理性から見れば、單に eine Reihe von successiven Dingen oder Zuständen を「自ら始める」一例に過ぎないであらう。然し自ら始める意味を感性界の出來事と見ずに、根源的行爲を通して、先驗的主觀の無限の深さに通ずるものとして、理性の格率であると考へるならば、そして格率を常に此義にのみ考へるならば、私たちは直ちに理論理性の制限と面てを合せねばならないだらう。何となればそは意志の問題であつて意志は理論理性に對する非論理的なものを含むからである。然しこれより外にどうして格率の眞義が考へられるだらう？理論理性と雖も格率(論理的格率)が圖式に由る悟性の原則と種別的に異なり、何等直觀に根抵を支持することなく、只 Sein に對する Sein sollen に於て、直接則るべきものを持つて主觀にさし示る Imperativ に於て、自らの支點を維持することを認めぬわけには行かぬであらう。これを認めないならば格率は無意義である。格率そのものゝ根據は叡知界と同樣に深くして極まりない主觀の底に根ざして居る。格率は Sollen であり Sollen は意志に基づく。ひとりこれに由つて理性の主觀的原則としての格率が悟性の原則から區別せられ、叡知的

世界への唯一の聯結が考へられるならば、理論理性は實踐的立場を必然的に豫想せねばならぬであらう。これすべてに合理的統一を與へんとする理論理性の矛盾である。然しながらまた避け難き矛盾である。何となれば若し理性の格率が意志を含まぬとするならば何より大切な規制原理もその意味を失ふであらう、規制する(regulieren)ことは悟性的でなくて、意志的に命ずることであるからである。さり乍ら理論理性に於てすべてこれ等は假定(Als ob)に留まる。それ故理論理性の前に格率の內面的規定は空虛な概念である。空虛の義は已に述べたる如くNichtsの意でなくて「限界」の義である。限界それ自身は純粹意志であつても、理論理性の前には、單に空虛な概念に過ぎない。勿論限界概念は「感性の制限と常に聯絡する」限り、積極的なものを含むことは上に述べた如くであるが、さればとて感性の領域以外に何等積極的なものを定立することは出來ない點で常に消極的である。(27) 理論的立場より見れば理念としての限界概念は解決し難き永久の課題である。これを解決するためには理論の假定を去つて實踐の事實に移らねばならない。實踐の立場より見れば空虛な概念も „.....so kann die Idee der praktischen Vernunft jederzeit wirklich, ....., in concreto gegeben werden.“ „Demnach ist die praktische Idee jederzeit höchst fruchtbar und in Ansehung der

wirklichen Handlung unumgänglich notwendig." (19) と考へられる。行爲的主體は純粹意志となり、「人」は理性的存在者となり、先驗的自由は實踐的自由となり、「自ら始める」に代つて「自ら行ふべき」の義が充分に示される。

宇宙論的理念に於ては未だこの「べき」の義が語られてゐない。理論理性より見れば當爲を含む行爲も現實界に屬するものとして、先驗的自由の一例に過ぎないこと上に述べた如くである。しかし根源的行爲は、理念に從つて實現するものとして、單なる現實界の事實ではない。それは理念と同樣に深く叡知界に根ざして居る。それは先驗的自由の一例ではなくて、先驗的自由そのものでなければならない。却つて實踐的自由のために先驗的自由が叡知的であるとも云はれやう。何となれば私たちは如實に理念について知ることは出來ず、只それが無制約者を含むものとして規制原理に役立つことに由つて、只そのことに由つて理念の超感性的性質を考へ得たのであるが、規制原理は格率であり、格率は Imperativ として、かくて實踐的自由に由つてはじめて必然的となり得るからである。先驗的理念の目的は「私たちの概念を經驗の束縛と自然觀察の制限から解放して、純粹悟性の對象であつて感性の達し得ぬ範圍を私たちの眼前に展げることにある。やうに思はれる。但しそれは私たちをし

て此對象を理論的に考察させんためでなく、却つて實踐的原理のためである」。(20) たとへば心理的理念の規制的價値は、最高なる先驗的原理としての意識を純化して人間心情（Gemüt）の無限の深さを示すために、宇宙論的理念のそれは自然に打ち克ち自由の世界を建設せんとする純粹意志のために、最後に神學的理念は、夫れに由つて世界秩序とその組織的統一を導き出すためでなく、却つて意志の最高目的を確立しやうがために、すべて理性の實踐的關心のため、「思辯の範圍外に道德的理念の世界を建設せんがため」に要請したものである。

宇宙論的理念としてその自由の意義を追求することに由つて、今や私たちは實踐的立場に達した。此立場から限界概念の意義を少しく回顧して見やう。限界概念は云はゞ理性の叡知界に於ける立脚點（Standpunkt）である。經驗と絕緣するためでなく、却つて經驗の組織的統一のために、理論理性が超感覺界にとらざるを得ない立脚點である。これより外に限界概念は、積極的內容——直觀、感覺に由つて入り込まんとする——を持つことを許されない。理論理性と云へども此限界を超て未知の世界にさまよひ入るは許されなかつた。此處に理論理性の格率の重要な意義があつた。然し今や此限界概念は實踐的格率として、叡知的性格として、純粹意志として考へら

れねばならない。此思想は他の半面に於て實踐的考察に重要な注意を與へるものである。私たちはともすれば實踐的自由、意志の自由をば內感に現はるゝ經驗的意識の一事實として、或はそれと混じて考へ易い。然し內感に現はるゝものは單なる心理學的事實として、それに先立つ他の事實から制約される。實踐的自由、純粹意志は「感覺的(pathologisch)に感性の動因より感觸せらるゝ」やうな arbitrium sensitivium (たとへ arbitrium liberum であるにせよ)に屬するもの[21]であつてはならない。先驗的自由と Willkür とは嚴密に區別せねばならない。Willkür に現はるゝ選擇の自由、感性よりの獨立も單なる意識の事實(Tatsache des Bewusstseins)に過ぎないならば、かくして「經驗に由つて」、「自然原因の一として知らるゝ」[22]實踐的自由であるならば、結局心理的事實に基づく經驗的自由であるに過ぎない。心理的自由は、自由の意義を他の自然能力の如く經驗的原理に由つて說明せんとするものである。從つてそれは時間制約の中に置かれ、たとへ自由であるとしても、その義は自然必然性の一種として所謂 automaton spirituale たり得るまでゞある。先驗的自由は凡ての經驗から獨立し、自然一般から制約せられてはならない筈である。[23]純粹意志の自由は常に先驗的宇宙論的自由と根抵を同じふし、自然制約とは異なる他の Regel と Ordnung に屬するものでなけ

ればならない。依然として限界概念の、かくして規制原理として先驗性を維持せねばならない。心理的自由は經驗制約の許に置かれる。純粹實踐的自由は、たとへ充實せられたる客觀性、現實性を持つにしても、それ自身は依然として理念でなければならぬ。卽ち實踐的自由は宇宙の根抵と同一の深きものより由來せねばならない。

カントはかくの如き理念としての實踐的自由を道德律に由る意志規定に見出した。それは經驗に由つて知り得るものでなく、從つて先驗的自由に從屬するものでなく、先驗的自由そのものゝ實踐的意義である。もつともカントは「自由の先驗的理念の上に自由の實踐的概念が成立する」(24)と云つたが、此意味は後者が前者に、單にその部分として從屬するの義と見るべきでなく、却つて前者とその根源を同じふすると解すべきであらう。先驗的自由は勿論理論理性の課題であつて、自然認識の組織的統一のために要請されたものであつた。然しながらその解決は實踐的理性の名の許に與へられねばならない。理論の假定(Als ob)より實踐の事實 Faktum der Vernunft) に移らねばならない。叡知界のための自由でなく、實踐的自由のための叡知界、實踐のための理性統一を求めねばならない。其處に於いて限界概念は直ちに實踐的格率として意志を規定し叡知的性格を實現する。卽ち理論的使用に於て超越的

であつた理性概念は、實踐理性の限界内に屬する故に内在的構成的となり、しかも悟性使用の内在性に比すれば、以前として超越的(transzendental)、規制的である。所謂「實踐的」とは此義に於いての意志規定に外ならない。„.....dass reine Vernunft praktisch sein, d. i. für sich unabhängig von allen Empirischen den Willen bestimmen könne.“(25) 此立場に於て甫めて理性の求めて、しかも理論的立場で充たし得なかつた實在性——übersinnliche Ordnung に屬する客觀的實在性が見出される。„Denn da kann wenigstens die Vernunft zur Willensbes immung zulangen und hat sofern immer objekive Realität, als es nur auf das Wollen ankommt.“(26) (未完)

## 附註 (カントの引用本文は Vorländ.rs Ausgabe に由る)

(1) Kritik der reinen Vernunft, S. 327.

(2) Ib. S. 320.

(3) Ib. S. 326.

(4) Prolegomena, S. 94.

(5) Ib. S. 126.

(6) Kritik der reinen Vernunft, S. 683-684.

(7) Prolegomena, S. 125, 126.

(8) Ib. S. 123.

(9) Ib. S. 134.

(10) Ib. S. 119.

(11) Kritik der reinen Vernunft, S. 451.

(12) Ib. S. 565.

(13) Ib. S. 565.

(14) Ib. S. 472.

(15) Ib. S. 475.

(16) Ib. S. 479.

(17) Ib. S. 481.

(18) Prolegomena, S. 114.

(19) Kritik der reinen Vernunft, S. 339.

(20) Prolegomena, S. 136.

(21) Kritik der reinen Vernunft, S. 470.

(22) Ib. S. 664-665.

(23) Kritik der praktischen Vernunft, S. 125.

(24) Kritik der reinen Vernunft, S. 470.

(25) Kritik der praktischen Vernunft, S. 55.

(26) Ib. S. 18.

(27) Kritik der reinen Vernunft, S. 286.